

江淹「雜體詩」三十首について

森 博 行
京 都 大 學

南朝梁の江淹（四四四～五〇五）、字は文通の文學は、六朝時代の文學者の多くがそうであるように、「文選」に収録された諸作品によって、今日までよく知られている。彼の代表作といわれる「恨賦」・「別賦」（共に卷一六）がそうであり、「雜體詩」三十首（卷三二）がそうである。

ところで、今この小論において考えてみようとするのは、江淹の文學の全貌を説明しようとするのではなく、右に述べた「雜體詩」三十首中の幾首かを取り上げて、江淹の文學的世界の一面について、及びそれに關わる幾つかの問題について、いささか分析を試みようとするものである。

—

さて、この「雜體詩」三十首というのは、「文選」の

江淹「雜體詩」三十首について（森）

「雜擬」の項に収録されていることからわかるように、模擬詩であるわけだが、江淹にはこの外に、「學魏文帝」及び「效阮公詩」十五首と題する、やはり模擬詩があつて、今日我々が見得る彼の全詩の半數近くを模擬詩が占めており、同じく梁の鍾嶸が、その著「詩品」の中で、江淹の詩を評して「文通は詩體總雜、摹擬に善し」といつていることを考え合せると、彼が模擬詩をよくものにしたことが窺える。ところで、文學作品における模擬は、例えば「文選」をみれば容易にわかるであろうが、いわば一種の文學形式あるいは創作方法・態度として盛んに行われたものであつて、模擬そのこと自體は、何も江淹獨りに限った特別の事柄ではない。にもかかわらず、彼の「雜體詩」三十首は、他の詩人の模擬作品とは、又彼自身の「學魏文帝」、「效阮公詩」十五首とも違った、獨自の價值あるいは意味を持っている。それは何か。以下、この點について先ず述べてみることにする。

「樂府」などの場合、題だけを借りて、本歌と餘り關係のない内容をうたう場合もあるけれども、一般的にいえば、

前代の作品に對する模擬は、單なるパロディではなく、模擬對象になった作品の形式・主題を踏襲しつつ、更に模擬者自身の新しい思想や感情を盛り込んでうたうという形をとる。例えば陸機の「擬古詩」十二首を始めとして、「文選」の「雜擬」の項に收録されている殆どの作品がそうである。ところが、江淹の「雜體詩」三十首は、それらの作品とは、創作態度・創作意圖を全く異にしているのであって、結論的にいえば、彼が「雜體詩」三十首において意圖したものは、彼自身の思想や感情をそこに寄託しようとするのではなく、實は漢代の作者不明の「古詩」以下、劉宋の休上人（湯惠休）に至るまでの三十人の詩を對象に、その詩人たちの詩的本質を五言詩によって、つまり創作によって記述しようとしたものである。だから、これは詩による文學批評乃至は詩史とでもいうべき性質を帯びており、高橋和巳氏の言葉を引用すれば、「詩の列傳」^③とでも呼ぶべき性質のものなのである。

ここに模擬對象になった詩人（詩人名が詩のタイトルになっている）と、タイトルに附けられたサブタイトル（こ

れは、その詩人の詩的本質を表わす文句になっている）とを、配列順に示すと、以下の如くである（小文字がサブタイトル）。

- | | |
|---------------------------------|------------------------|
| 1 古離別（詩人名無し） | 2 李都尉從軍陵 |
| 3 班婕妤詠扇 | 4 魏文帝遊宴曹丕 |
| 5 陳思王贈友曹植 | 6 劉文學感遇楨 |
| 7 王侍中懷德祭 | 8 嵇中散言志康 |
| 9 阮步兵詠懷祭 | 10 張司空離情華 |
| 11 潘黃門悼亡 <small>五臣作述哀</small> 岳 | 12 陸平原羈宦機 |
| 13 左記室詠史思 | 14 張黃門苦雨協 |
| 15 劉太尉傷亂琨 | 16 盧中郎感交誼 |
| 17 郭弘農遊仙璞 | 18 孫廷尉雜述綽 ^④ |
| 19 許徵君自序詢 | 20 殷東陽興囑仲文 |
| 21 謝僕射遊覽混 | 22 陶徵君田居潛 |
| 23 謝臨川遊山靈運 | 24 顏特進侍宴延之 |
| 25 謝法曹贈別惠連 | 26 王徵君養疾微 |
| 27 袁太尉從駕淑 | 28 謝光祿郊遊莊 |

29 鮑參軍戎行照

30 休上人別怨

以上、今日ではその名前すら餘りおめにかからない詩人も含まれているが、文學史的にみて、漢から宋までの注目に値すると思われる詩人が、殆ど網羅されていることがわかる（この點については、後の方でもう少し言及する）。

二

さていよいよ、「雜體詩」三十首の中の先ず第一首「古離別」を例に、彼の作品が實際如何なるものであるか、具體的に示してみよう。

遠與君別者 遠く君と別るる者は
乃至鴈門關 乃ち鴈門關に至る
黃雲蔽千里 黃雲は千里を蔽ひ
遊子何時還 遊子は何れの時にか還らん
送君如昨日 君を送るは昨日の如きに
簷前露已團 簷前に露は已に團なり

江淹「雜體詩」三十首について（森）

不惜蕙草晚 蕙草の晩るるを惜まず
所悲道里寒 悲しむ所は道里の寒きなり
君在天一涯 君は天の一涯に在り
妾身長別離 妾が身は長く別離す
願一見顔色 一たび顔色を見んことを願えども
不異瓊樹枝 瓊樹の枝に異ならず
兔絲及水萍 兔絲と水萍と
所寄終不移 寄する所 終に移らず

「古詩」十九首（「文選」卷二九）を一讀したことのある人なら、江淹のこの模擬詩は、「古詩」十九首の其の一を特に下敷にして製作されているらしいことは、直ちにわかるであろう。「古詩」其の一は、次の如くである。

行行重行行 行きて行きて重ねて行きて
與君生別離 君と生きながら別離す
相去萬餘里 相去ること萬餘里
各在天一涯 各おの天の一涯に在り

道路阻且長 道路は阻たりて且つ長く

會面安可知 會面 安んぞ知るべけんや

胡馬依北風 胡馬は北風に依り

越鳥巢南枝 越鳥は南枝に巢くう

相去日已遠 相去ること日び已に遠く

衣帶日已緩 衣帶は日び已に緩む

浮雲蔽白日 浮雲は白日を蔽い

遊子不顧反 遊子は顧反せず

思君令人老 君を思えば人をして老いしむ

歲月忽已晚 歲月 忽ち已に晩る

棄捐勿復道 棄捐して復たは道う勿かれ

努力加餐飯 努力して餐飯を加えよ

この兩首を照し合せてみると、江淹の模擬詩の「遠く君と別る者は、乃ち鴈門關に至る」に始まり、「兎絲と水萍と、寄する所終に移らず」に終わる詩全體の構成と、「古詩」の「行き行きて重ねて行き行き、君と生きながら別離す」に始まり、「棄捐して復たは道う勿かれ、努力して餐

飯を加えよ」に終わる構成との相似性、及び兩首の間の措辭、句作りの類似性について氣づくであろう。試みに江淹の「古離別」にみられる「古詩」其の一と同一の措辭・語類の句作りを拾ってみると、「遠與君別者」(「與君生別離」)(内が本歌、以下同)、「黃雲蔽千里」(「浮雲蔽白日」)、「遊子何時還」(「遊子不顧反」)、「君在天一涯」(「各在天一涯」)、「妾身長別離」(「與君生別離」)の多くにわたっている。このことは既に、李善が「古離別」に注釋を加えて、「江の此の製、直に其の體を學ぶのみに非ずして、亦其の文をも兼ね用う」と指摘し、「古詩」を注に引いているのだが、更に押韻について一點附け加えておくと、兩首とも途中一個所で換韻しており、しかも、「古離別」の後半の韻字「涯」「離」「枝」「移」と、「古詩」の前半の韻字「離」「涯」(「六臣註文選」の注に「音宜」とある)「知」「枝」とは同韻の上平支韻であって、これも偶然ではないと思われる。^⑤

要するに、この模擬詩は、擬作者江淹みずからの離別の感興を託すことを目的として製作されているのではなく、

いわば第三者的な立場から模擬製作して、本歌にわざと似せて作られているのである。

このことを一層明らかにさせるために、「古詩」十九首其の一に對する他の詩人の模擬詩、ここでは陸機の「擬古詩」十二首（文選「卷三〇」中の第一首「擬行行重行行」詩）を示し、江淹の「古離別」と比較してみることにする。

陸機の「擬行行重行行」詩は、次の如くである。

悠悠行邁遠　悠悠として行き邁ゆぎて遠く

戚戚憂思深　戚戚として憂思深し

此思亦何思　此の思しい亦何の思しいぞ

思君徽與音　君が徽と音おとを思おもう

音徽日夜離　音徽は日夜離れ

緬邈若飛沈　緬邈として飛と沈しずの若し

王鮪懷河岫　王鮪は河岫かきうを懷いだい

晨風思北林　晨風は北林を思おもう

遊子眇天末　遊子は天末に眇みたり

還期不可尋　還期は尋たずねべからず

江淹「雜體詩」三十首について（森）

驚飈きやうひやう褰反信　驚飈は反信はんしんを褰ひち

歸雲難寄音　歸雲は音を寄よせ難がたし

佇立想萬里　佇立して萬里を想おもえば

沈思萃我心　沈思は我が心こころに萃あまる

攬衣有餘帶　衣きを攬とれば餘帶あま有り

循形不盈衿　形に循したがえば衿えりに盈あたず

去去遺情累　去り去りて情累じやうるいを遺のこて

安處撫清琴　安處して清琴を撫なさん

陸機のこの模擬詩は、「古詩」にうたう「生別離」の悲哀を一篇の主題としながらも、必ずしも、そっくりそのまま模倣するものではない。やはり措辭、句作りなど修辭の面からいえば、陸機は、江淹の模擬詩にみられるのとは異って、「古詩」其の一と同一の語は、できるだけ避けるように努めている跡が窺われるのであって、同一の語としてあるのは、「思君」「遊子」の僅か二語のみであり、類似的の句としては、陸機の詩の「攬衣有餘帶」が、「古詩」の「衣帶日已緩」、又陸機の詩の「王鮪懷河岫、晨風思北林」

という對句と、「古詩」の「胡馬依北風、越鳥巢南枝」（これらも類似的表現、同一の語の使用は、意識的に避けているようだ）という對句との關連性が指摘できるにすぎない。押韻も、陸機は下平侵韻の一韻で通している。

陸機のこの作品が如何なる體驗に本づいて製作されたのか、ある想像は可能であっても、その跡を事實に即して具體的に闡明するのは、簡單ではないであろうが、この模擬詩も、「佇立して萬里を想えば、沈思は我が心に萃まる」や、「去り去りて情景を遺て、安處して清琴を撫さん」などの表現から考えて、輿膳宏氏が、「中國詩文選10・潘岳・陸機」（筑摩書房）の中で、陸機の「擬古詩」十二首中の他の作品を例にして指摘されている、強い「自己移入ぶり」（二六五頁）を示しており、「生別離」というテーマを襲いつつも、結局の所、彼自身の表現による、彼自身のものであることは疑いないであろう。

以上、右に述べた陸機の模擬詩を比較参照することにより、江淹の模擬詩「古離別」は、意識的に本歌に似せて製作されていることは、ほぼ了解されると思う。

次の「雜體詩」に移ろう。魏の文帝曹丕の詩に模擬した作品、題して「魏文帝遊宴曹丕」。

置酒坐飛閣	置酒して飛閣に坐し
逍遙臨華池	逍遙して華池に臨む
神巖自遠至	神巖は遠き自り至り
左右芙蓉披	左右に芙蓉 びく 披く
綠竹夾清水	綠竹は清水を夾み
秋蘭被幽涯	秋蘭は幽涯を被う
月出照園中	月出でて園中を照らし
冠珮相追隨	冠珮は相追隨す
客從南楚來	客は南楚從り來り
爲我吹參差	我が爲に參差を吹く
淵魚猶伏蒲	淵魚すら猶お蒲に伏し
聽者未云疲	聽く者は未だ云に疲れず
高文一何綺	高文は一に何ぞ綺なる
小儒安足爲	小儒は安んぞ爲るに足らん
肅肅廣殿陰	肅肅として廣殿は陰り

雀聲愁北林 雀聲は北林に愁う

衆賓還城邑 衆賓 城邑に還らば

何以慰吾心 何を以てか吾が心を慰めん

この模擬詩は、五臣注に「此れ『芙蓉池作』に擬するなり」というように、中心的には「芙蓉池作」詩（「文選」卷二二）に模擬したものである。文帝のこの詩は、以下の如くである。

乘輦夜行遊 輦に乗りて夜に行遊し

逍遙步西園 逍遙して西園に歩む

雙渠相溉灌 雙渠は相溉灌し

嘉木繞通川 嘉木は通川を繞る

卑枝拂羽蓋 卑枝は羽蓋を拂い

脩條摩蒼天 脩條は蒼天を摩す

驚風扶輪轂 驚風は輪轂まろこに扶たすり

飛鳥翔我前 飛鳥は我が前を翔る

丹霞夾明月 丹霞は明月を夾み

江淹「雜體詩」三十首について（森）

華星出雲間 華星は雲間より出づ

上天垂光采 上天 光采垂れ

五色一何鮮 五色 一に何ぞ鮮かなる

壽命非松喬 壽命は松喬に非ざれば

誰能得神仙 誰か能く神仙を得ん

遨遊快心意 遨遊して心意を快たのましめ

保己終百年 己を保ちて百年を終えん

詩全體の結構、狀況設定、テーマなど、一見して兩首の類似性を窺うことができるであらう。ただし、文帝の詩が、「壽命は松喬に非ざれば、誰か能く神仙を得ん。遨遊して心意を快ましめ、己を保ちて百年を終えん」と、快樂によつて百年の壽命を全うしたいという願望で結ばれているのに、江淹の模擬詩は、「肅肅として廣殿は陰り、雀聲は北林に愁う。衆賓城邑に還らば、何を以てか吾が心を慰めん」と、歡樂後に襲ってくる悲涼で終っているところは、著しい違いであるのだが、このことについては、この兩首の間には、語彙が、「逍遙」「芙蓉」以外は重なっていないの

は何故であるのかを説明する過程で、筆者の考えを述べてみることにする。

右に述べたように、兩首の間には同一の語が少ないのであるが、實は、江淹のこの模擬詩は、その語彙を文帝の別の作品から多く借用しているのであって、例えば「善哉行」(「樂府詩集」卷三六には四首收録されてあり、「樂府詩集」の配列順に従って、假に其一・其二・其三・其四としておく)から引用すると、「夕宴華池陰」其三(「逍遙臨華池」)(内は江淹の模擬詩。以下同)「有客從南來」(「爲我彈清琴」其三(「客從南楚來」(「爲我吹參差」)、「悲鳴集北林」其三(「雀聲愁北林」)、「衆賓飽滿歸」其一(「衆賓還城邑」)の如くである。そして右に挙げた句のうち、「北林」を含む句は、五解ある「善哉行」の四解の中にある句であって、その四解は、「飛鳥は翻翔として舞い、悲鳴して北林に集う。樂しみ極まりて哀情來り、寥亮として肝心を摧く」とうたわれており、又最後に挙げた「衆賓」の句を含む一聯は、やはり五解ある「善哉行」の四解の尾聯であって、「衆賓は飽滿して歸るも、主人は悉さざるに苦しむ」とうたわれている。

つまり、江淹が文帝の「遊宴」を單なる歡樂のみで終らせず、歡樂後に襲ってくる悲涼感で結んでいるのは、文帝の詩の中に右に示した詩があることを、江淹は知っていたからであり、且つこういう面も文帝の詩の本質として無視できないと考えたからであろう。中心的には「芙蓉池作」詩のスタイルに倣いながら、快樂だけをうたわなかったのは、くまなく目を配っていた江淹の周到さを却って物語るものではないだろうか。

ともかく右に述べたことから、この模擬詩も、文帝の詩のスタイルにことさらに似せて製作されていることは、うなづけるであろうが、このことを別の角度から、更に明らかにさせてみよう。その資料は、謝靈運の模擬詩「擬魏太子鄴中集」八首(「文選」卷三〇)である。八首というのは、魏太子即ち文帝、王粲、陳琳、徐幹、劉楨、應瑒、阮瑀、平原侯植、所謂建安の七子中の六人と曹氏兄弟丕・植を合せた八名を詠じたことをいう。その魏太子の場合は次の如き詩である。

百川赴巨海 百川は巨海に赴き
 衆星環北辰 衆星は北辰を環る
 照灼爛霄漢 照灼として霄漢^{かがや}爛き
 遙裔起長津 遙裔として長津起る
 天地中橫潰 天地は中に横潰し
 家王拯生民 家王は生民を拯う
 區宇既滌蕩 區宇は既に滌蕩たり
 群英必來臻 群英は必ず來り臻^{いた}る
 泰此欽賢性 此の欽賢の性を泰くし
 由來常懷仁 由來 常に仁を懷う
 況值衆君子 況んや衆君子に値いて
 傾心隆日新 心を傾むけて日新に隆^{たか}なるをや
 論物靡浮說 物を論じて浮說靡く
 析理實敷陳 理を析して敷陳^{じつ}に實にす
 羅縷豈闕辭 羅縷 豈に辭を闕^{くわ}かんや
 窈窕究天人 窈窕として天人を究む
 澄觴滿金疊 澄觴は金疊に滿ち
 連榻設華茵 連榻に華茵を設く

江淹「雜體詩」三十首について（森）

急絃動飛聽 急絃は飛聽を動かし
 清歌拂梁塵 清歌は梁塵を拂う
 何言相遇易 何ぞ言わん相遇うこと易しと
 此歡信可珍 此の歡は信に珍とすべし

陳祚明が「前半の風調、建安に類せず」（『采菽堂古詩選』卷一七）というのを待つまでもなく、魏の文帝の詩、今問題になっている「芙蓉池作」詩だけでなく、全ての詩に似ていない。殊に「物を論じて浮說靡く、理を析して敷陳を實にす」という表現は、恐らく東晋の玄言詩を経た後でなければ生まれ得ないものではないか、と思われるのだが、靈運のこの詩をみて先ず目につくのは、文帝の詩が十六句、江淹の模擬詩が文帝の詩とほぼ同数の十八句であるのに對して、この詩は、二十二句ということである。六句の差は、それほど大したものではないようにみえるかも知れないが、現存する範圍内では、文帝の作品は、「大牆上蒿行」（『樂府詩集』卷三九）の七十八句という特別に長いのを除いては、皆な比較的短篇であつて、二十句以上の作品は全然みられ

ない（ただし、「樂府」は一解を一首とみなした）。ところが、靈運の詩になると、「還舊園作見顏范二中書」（「文選」卷二五）の四十二句、「初去郡」（「同右」卷二六）の三十二句、「石門新營所住四面高山迴溪石瀨脩竹茂林詩」（「同右」卷三〇）の二十六句などがあり、二十句以上の詩になるとかなりの數に上るのであって、靈運のこの模擬詩も、とりもなおさず靈運詩のスタイルの特徴を示すものにほかならない。因みに、江淹の靈運の詩に對する模擬詩「謝臨川遊山靈運」を示すと次の如くである。

- | | |
|----------|----------|
| 1 江海經漣迴 | 2 山嶠備盈缺 |
| 3 靈境信淹留 | 4 賞心非徒設 |
| 5 平明登雲峯 | 6 杳與廬霍絕 |
| 7 碧鄣長周流 | 8 金潭恒澄澈 |
| 9 桐林帶晨霞 | 10 石壁映初晰 |
| 11 乳竇既滴瀝 | 12 丹井復寥泚 |
| 13 岳嶠轉奇秀 | 14 岑巖還相蔽 |
| 15 赤玉隱瑤溪 | 16 雲錦被沙汭 |

- | | |
|----------|----------|
| 17 夜聞猩猩啼 | 18 朝見鸛風逝 |
| 19 南中氣候暖 | 20 朱華凌白雪 |
| 21 幸遊建德鄉 | 22 觀奇經禹穴 |
| 23 身名竟誰辯 | 24 圖史終磨滅 |
| 25 且汎桂水潮 | 26 映月遊海澨 |
| 27 攝生貴處順 | 28 將爲智者說 |

全篇二十八句の、殆ど對句でなる長篇であり、靈運の詩の特徴が對句の積み重ねと共に長篇であったことを傍證しており、實際その通りなのである。

翻つて考えてみるに、靈運がこの模擬詩を作った意圖、それは、黃節著「謝康樂詩註」（卷四）の注に引く元の方回の語「序に『其の主不文』と云い、又『雄猜にして忌多し』と曰うは、宋武帝・文帝をしてこれを見せしむれば、皆な必ず切齒せん。蓋し『不文』は明らかに劉裕（武帝）を譏り、『忌多し』は亦徐（羨之）・傅（亮）・謝（晦）・檀（道濟）を誅せし者の諱む所也。靈運の誅に坐すは、此の序亦賈禍の一端也」（『内は「擬魏太子鄴中集」八首の總序の語、方回

の文に「序」というのがそれである。又（一）は引用者）に暗示されているが、この靈運の詩の總序に、「建安末、余れ時に鄴宮に在り、朝に遊び夕に譙し、歡愉の極を究む。天下の良辰・美景・賞心・樂事、四者并せ難し。今昆弟朋友、二三の諸彦、共にこれを盡せり矣。古來此の娛しみ、書籍に未だ見ず」という、魏文帝を中心とする鄴都における建安の文人たちの、より自由な君臣隔てのない歡樂を羨望しつつ、自己の不遇を託すことになったにちがいないのであつて、江淹の詩とは、やはり創作意圖がちがっているであり、本歌との近似性がちがうのも當然のことなのである。又そもそも、靈運は、江淹のように文帝の特定の詩に模倣しようなどとは意識してはいなかったと思われる（誤解のないようにことわっておくと、靈運の八首の模倣詩が、彼が對象にした詩人の詩を全然意識していなかった、又對象にした詩人の語を全然用いていないというわけではない。例えば平原侯植に模倣した作の尾聯「願以黃髮期、養生念將老」は、曹植の「贈白馬王彪」（「文選」卷二四）の「王其愛玉體、俱享黃髮期」にもとづいている）。

江淹「雜體詩」三十首について（森）

そして、ちょうど靈運と同時代の、靈運と並稱される詩人顏延之が、「五君詠」（「文選」卷二）を製作したとき、「五君」即ち阮籍・嵇康・劉伶・阮咸・向秀、所謂竹林の七賢中の人物の生き方に對する共感があつて、「五君」の姿に顏延之の姿が重なつて詩に投影されていたのと同じように、靈運は、文帝の傳記風に詩を裝いつつ、實は靈運自身の文帝の立場に對する共感、靈運自身の願望をもこの詩に投射したのであつて、尾聯の「何ぞ言わん相遇うこと易しと、此の歡は信に珍とすべし」は、文帝の表明であると同時に、靈運その人の表白でもあつたと思われる。更にいえば、「五君詠」詩が、「文選」の「詠史」の項目に入れているように、靈運のこの詩も、「詠史」の面をも兼ね備えているのである。ここに詳しく述べる餘裕はないが、八首全て右に述べたことと、色合いの違いこそあれ、大體同じことがいえる。

いささか靈運の詩にかかずらわりすぎたようだが、又「雜體詩」に戻ることにする。

班婕妤詠扇

紈扇如圓月 紈扇は圓月の如し

出自機中素 機中の素自り出づ

畫作秦王女 畫き作す秦王の女の

乘鸞向煙霧 鸞に乗りて煙霧に向かうを

采色世所重 采色は世の重んずる所なり

雖新不代故 新と雖も故きに代らず

竊愁涼風至 竊かに愁う涼風至り

吹我玉階樹 我が玉階の樹を吹き

君子恩未畢 君子の恩 未だ畢らざるに

零落在中路 零落して中路に在らんことを

班婕妤の作品は、次のようなものである。

怨歌行（文選）卷二七

新製齊紈素 新たに製る齊の紈素

皎潔如霜雪 皎潔なること霜雪の如し

裁爲合歡扇 裁ちて合歡の扇と爲せば

團團似明月 團團として明月に似たり

出入君懷袖 君が懷袖に出入し

動搖微風發 動搖して微風發す

常恐秋節至 常に恐る秋節至り

涼風奪炎熱 涼風は炎熱を奪い

棄捐篋笥中 篋笥の中に棄捐せられ

恩情中道絕 恩情は中道に絶えんことを

模擬詩にうたわれている「畫き作す秦王の女の、鸞に乗りて煙霧に向かうを」という一聯は、いかにも江淹の神仙愛好をよく表わす所であるが、冒頭の「紈扇は圓月の如し、機中の素自り出づ」は、まさしく本歌の冒頭「新たに製る齊の紈素、皎潔なること霜雪の如し。裁ちて合歡の扇と爲せば、團團として明月に似たり」四句を二句に短縮しただけであり、結びの「竊かに愁う涼風至り、我が玉階の樹を吹き、君子の恩未だ畢らざるに、零落して中路に在らんことを」四句は、本歌の結び「常に恐る秋節至り、涼風は炎熱を奪い、篋笥の中に棄捐せられ、恩情は中道に絶えんこ

とを」四句と、同一の語彙は「涼風」しかないとはいへ、句作り・構成・内容にわたって殆ど同じであって、うっかりすると、どちらが本物でどちらが贋物か區別がつかなくなるほど酷似している。もっとも當の「怨歌行」が班婕妤の實作かどうかは疑わしいのだが。

このように、江淹の「雜體詩」は、原詩の「再現」を目標としたものであり、ある場合には、江淹の意圖からすれば見事に成功を収めている。陶淵明の詩に模擬したものがある。その詩は、次のような詩である。

種苗在東臯 苗を種えて東臯に在り
苗生滿阡陌 苗生じて阡陌に滿つ
雖有荷鋤倦 荷鋤の倦有りと雖も
濁酒聊自適 濁酒 聊か自適す
日暮巾柴車 日暮れて柴車に巾し
路闌光已夕 路闌くして光は已に夕なり
歸人望煙火 歸人は煙火を望み
稚子候檐隙 稚子は檐隙に候つ

江淹「雜體詩」三十首について（森）

問君亦何爲 君に問う亦何をか爲す
百年會有役 百年 會あひまず役有り
但願桑麻成 但だ願う桑麻成り
蠶月得紡績 蠶月には紡績するを得んことを
素心正如此 素心 正に此くの如し
開逕望三益 逕を開いて三益を望む

この詩は、既に一章で示しておいたように、サブタイトルに「田居」とあり、「歸園田居」詩に模擬したものである。淵明の「歸園田居」五首の中の其の三を示すと、次の如くである。

種豆南山下 豆を種う南山の下
草盛豆苗稀 草盛んにして豆苗稀なり
晨興理荒穢 晨あしたに興きて荒穢を理え
帶月荷鋤歸 月を帯びて鋤を荷いて歸る
道狹草木長 道狹くして草木長び
夕露沾我衣 夕露は我が衣を霑す

衣霑不足惜 衣の霑れるは惜しむに足らず

但使願無違 但だ願いをして違ふこと無からしめよ

〔靖節先生集〕卷二

改めて細かい説明をしなくても、次の事實を語れば、この模擬詩の模擬ぶりは、おのずと了解されるであろう。というのは、江淹のこの模擬詩が誤って淵明の「歸園田居」中に紛れ込んだことがあり、蘇軾はそうだと知らず、淵明の實作五首と一緒に、江淹のこの擬作にも和しているのである。幾分逸話めいた話に聞こえるが、事實なのであって、試みに蘇軾の次韻詩を示すと、次の如くである。

昔我在廣陵 悵望柴桑陌。

長吟飲酒詩 願得一笑適。

當時已放浪 朝坐夕不夕。

矧今長閒人 一却展過隙。

江山互隱見 出沒爲我役。

斜川追淵明 東臯友王績。

詩成竟何爲 六博本無益。

〔東坡先生編年詩集〕卷三九

淵明の詩に對する江淹の模擬詩の擬似性について、又蘇軾の模擬に向かう態度について、色々議論があるけれども、いづれにしても、「淵明の文學への深い愛好と傾倒」（小川環樹博士「蘇軾詩注上・解説」中國詩人選集二集一〇頁）とを寄せていた蘇軾をも「欺く」ほどの出来ばえだったわけである。嚴羽が「滄浪詩話」において、「擬古は惟れ江文通最も長ず。淵明に擬せば淵明に似、康樂（謝靈運）に擬せば康樂に似、左思に擬せば左思に似、郭璞に擬せば郭璞に似たり」と淵明詩に對する模擬詩を最先に置いて評する所以であり、陳祚明が、「語語間雋にして、彭澤（陶淵明）詩の秀琢なる者なり」（「古詩選」卷二四）と絶賛する所以である。なお、江淹以前の詩人鮑照も、しばしば模擬詩を作っており、例えば「擬古」八首・「學古」・「擬青陵上柏」・「擬阮公夜中不能寐」・「學劉公幹體」五首・「學陶彭澤體」という作品を残しているのだが、彼の淵明に對する模擬詩

「學陶彭澤體」(「鮑氏集」卷四)は、次の如くである。

長憂非生意 長憂は生意に非ず

短願不須多 短願は多くを須いず

但使罇酒滿 但だ罇酒をして滿たし

朋舊數相過 朋舊をして數ば相過ぎしめん

秋風七八月 秋風 七八月

清露潤綺羅 清露は綺羅を潤す

提琴當戶坐 琴を提げて戸に當りて坐し

歎息望天河 歎息して天河を望む

保此無傾動 此を保ちて傾動すること無からん

寧復滯風波 寧ぞ復た風波に滯らんや

鮑照は、自然の風物を嚴酷なものとしてとらえ、彼の起伏の激しい内面のうねりの象徴としてうたうのを、一つの特色としている。例えば「風起りて洲渚寒く、雲上に日は輝き無し。連山に煙霧眇たり、長波は迴かにして依り難し」(「鮑氏集」卷六「吳興黃浦亭庾中郎別」詩)とうたう句がそうで

江淹「雜體詩」三十首について(森)

あって、表面に直截的に現われていないが、この模擬詩にうたう「此を保ちて傾動すること無からん、寧ぞ復た風波に滯らんや」という結びも、内に激しい感情の波打ちを孕んでおり、まぎれもなく鮑照詩のうたいぶりである。鮑照のこの模擬詩は、江淹の詩とは違って、淵明の詩に借りながら、鮑照自身の田園的・脱俗的な生活のあこがれをうたったものにちがいない。^⑧

三

以上、他の詩人の模擬詩と比較しながら、いくつかの作品を挙げてみた通り、江淹の「雜體詩」三十首は、本歌とできる限り似せることによって、二語で表わされた個々のサブタイトルと共に、前代の詩人の詩的本質を敘述しようとする意圖されたものであり、且つ三十首全體として文學史を構成しようとする意圖されたものである。そして、それはおおむね「文學史家」としての彼の見識を示すものである。彼が取り上げた詩人たちが、彼の單なる恣意的な主觀や好みから出ているのではないことは、次に示す三つの資料、沈

約撰「宋書」の「謝靈運傳論」(卷六七)、「詩品」の「序」及び梁の蕭子顯撰「南齊書」の「文學傳論」(卷五二)を参照すれば首肯されるであらう。

「宋書・謝靈運傳論」

建安に至りて、曹氏基命し、二祖(曹操・曹丕)陳王(曹植)、咸な盛藻を蓄え、甫めて乃ち情を以て文に緯し、文を以て質を被う。漢自り魏に至るまで、四百餘年、辭人才子、文體三たび變ず。相如は巧に形似の言を爲し、班固は情理の説に長じ、子建(曹植)・仲宣(王粲)は氣質を以て體と爲し、並びに標れて能く美を擅にし、獨り當時に映ず。是を以て一世の士、各おの相慕い習う。其の馳流の始まる所を原ぬるに、同じく風・騷を祖とせざるは莫し。徒らに賞好情を異にするを以て、故に意製相詭(ことな)る。降りて元康に及んで、潘(岳)・陸(機)特に秀で、律は班・賈と異にし、體は曹(植)・王(粲)を變じ、綱旨は星のごとく稠く、繁文は綺のごとく合す。平臺の逸響を綴り、南皮の高韻を採り、遺風餘烈、事は江右を極む。

有晉の中興、玄風獨り振い、學を爲すは柱下に窮まり、博物は七篇に止む。文辭を馳騁して、義は此に單く。建武自り義熙に暨るまで、歷載將に百にならんとし、響きを綴り辭を聯ね、波の屬なるがごとく雲の委むがごとくなりと雖も、言を上德に寄せ、意を玄珠に託さざるは莫く、遒麗の辭、聞こゆる無きのみ。(殷)仲文始めて孫(綽)・許(詢)の風を革め、叔原(謝混)大いに太元の氣を變ず。爰に宋氏に逮んで、顔(延之)・謝(靈運)聲を騰ぐ。靈運の興會標舉、延年の體裁明密、並びに軌を前秀に方べ、範を後昆に垂る。

(「線は「雜體詩」中の詩人。又()は引用者。以下同)

「詩品・序」

漢の李陵に逮び、始めて五言の目を著わす。古詩は眇邈として、人も世も詳らかにし難し。其の文體を推せば、固に是れ炎漢の製にして、衰周の倡に非ざるなり。王・楊・枚・馬の徒自り、辭賦は競爽すれども、吟詠は聞ゆること靡し。李都尉從り班婕妤好に迄るまで、將に百年な

らんとする間、婦人有り、一人のみ。詩人の風は、頗とに已に闕喪す。東京二百載中、唯だ班固の詠史有るも、質朴にして文なし。降りて建安に及び、曹公父子は、厚く斯文を好む。平原(曹植)兄弟は、鬱として文棟爲り。劉楨・王粲は、其の羽翼爲り。次に龍に攀よじ鳳に託し、自ら屬車に致す者有り、蓋し百を以て計う。彬彬の盛は、大いに時に備われり。爾の後陵遲衰微して、有晉に迄る。太康中、三張(張載・張協・張亢)・二陸(陸機・陸雲)・兩潘(潘岳・潘尼)・一左(左思)、勃爾として俱に興り、前王を踵武し、風流未だ沫やまず、亦た文章の中興なり。永嘉の時、黃老を貴び、稍く虚談を尙ぶ。時に篇什は、理其の辭に過ぎ、淡乎として味わい寡なし。爰に江左に及び、微波尙お傳わる。孫綽・許詢・桓・庾諸公の詩は、皆な平典にして道德論に似、建安の風力盡きたり。是より先、郭景純(璞)は儒上の才を用て、其の體を創變し、劉越石(琨)は清剛の氣に仗りて、厥の美を賛成す。然れども彼は衆くして我は寡なく、未だ俗を動かす能わず。義熙中に逮びて、謝益壽(混)斐然として繼ぎ作る。元嘉

江淹「雜體詩」三十首について(森)

中、謝靈運有り、才高く詞盛んにして、富艶蹤い難し。固より已に劉(琨)・郭(璞)を含跨し、潘(岳)・左(思)を凌轢す。

(訓讀は「中國文明選13・文學論集」朝日新聞社刊の「詩品」の部分、與膳宏氏譯注によつた)

「南齊書・文學傳論」

五言の製、獨り衆品に秀づ。習玩を理と爲すも、事久しければ則ち瀆けがれ、文章に在りては、彌いよ凡舊を思う。若し新篇無くんば、代りて雄たる能わず。建安は體を一にするも、典論短長互いに出だす。潘(岳)・陸(機)名を齊しくするも、機・岳の文永く異なる。江左の風味、道家の言を盛んにし、郭璞は其の靈變を擧げ、許詢は其の名理を極む。(殷)仲文の玄氣、猶お盡くは除かず、謝混は情新たなるも、名を得ること未だ盛んならず。顏(延之)・謝(靈運)並び起ち、乃ち各おの奇を擅にし、休(上人)・鮑(照)後れて出で、威あはな亦世に標る。

長い引用になったが、右に引いた三つの資料を参照しながら、漢から劉宋までの詩の流れを鳥瞰するとき、江淹が取り上げた詩人が、客觀的にかなり妥當性を持つものであることは確認できるであろう。ただし、「南齊書」については、唐の劉知幾が「史通」(外篇・古今正史卷二二)の中では、「齊史、江淹始めて詔を受けて著述す。史の難き所志より出づるは無きを以て、故に先ず十志を著し、以て其の才を見^あわす」といい、又これを受けて、北宋の曾鞏が「南齊書目錄序」^⑨に、「始め江淹已に十志を爲^{つく}り、沈約又齊紀を爲る。而して子顯自ら武帝に表し、別に此の書を爲る」といい、江淹も「南齊書」の「志」の部分を作ったことを記しており、あるいは「傳」その他の部分も、江淹の手になる草稿があって、蕭子顯は、それを利用してゐるかも知れない、ということを斟酌しておく必要があるが、普通の文學史家が散文で行うところを、韻文で行ったのが「雜體詩」三十首であり、他ならぬ五言詩によって詩の流れを跡づけてみるという試みは、五言詩が詩の本流としての地位を、獲得してゐたということを示すものであろう。^⑩

四

これまで、「雜體詩」のいく首かについて述べてきた通り、それらは大抵巧みに模擬されているので、逆に「雜體詩」から、模擬對象になった詩人の詩的本質、そこまできなくとも詩のスタイルの特徴がどんな風であつたか、ある類推をすることが可能になる。既に示した謝靈運の詩に對する模擬詩がそうであつたが、ここでもう一つもっと顯著な例を示してみよう。

昨發赤亭渚	今宿浦陽汭
方作雲峯異	豈伊千里別
芳塵未歇席	潞淚猶在袂
停鱸望極浦	弭棹阻風雪
風雪既經時	夜永起懷思
汎濫北湖遊	岩亭南樓期
點翰詠新賞	開袞瑩所疑
擣芳愛氣馥	拾藥憐色滋

色滋畏沃若	人事亦銷鑠
子襟怨勿往	谷風諛輕薄
共秉延州信	無慙仲路諾
靈芝望三秀	孤筠情所託
所託已慙慙	祇足攪懷人
今行嶠嶠外	銜思至海濱
覲子杳未儻	歎睇在何辰
雜珮雖可贈	疏華竟無陳
無陳心悵勞	旅人豈遊遨
幸及風雪霽	青春滿江皋
解纜候前侶	還望方鬱陶
煙景若離遠	末響寄瓊瑤

この詩は、謝惠連の詩に模擬した「謝法曹贈別惠連」である。八句毎に換韻しつつ綿々と續く四十句からなる長篇詩であるが、その換韻する所は、所謂蟬聯體と呼ばれる修辭技巧を使っている。ところが、今日みられる惠連の詩には、

紀郢有通遼	通遼並軒車
帘帘雕輪馳	軒軒翠蓋舒
撰策之五尹	振轡從三閭
推劍馮前軾	鳴佩專後輿

とうたう「長安有狹邪行」と題する、極めて不完全な闕文が一つ、僅かに残っているのみで、^⑩こういう手法は、必ずしも特徴的ではないかのようにみえるが、今日傳わっていない惠連の大半の詩の中に、彼の詩的スタイルの特徴として、人々の目をひく蟬聯體の巧妙な驅使があった、と想像されるのである。

ところで、「雜體詩」三十首の全てが、このように逆に類推を可能にさせるほどに本歌と似ているか、その本質をよく傳えているかという点、必ずしもそうでない。次に、今までみた模擬詩と少々違って、むしろ本歌とのずれの方を感じさせる作品についてみてみることにする。

先ず、阮籍の詩に模擬した作品を示してみよう。サブタイトルの、いうまでもなく「詠懷」である。

青鳥海上遊 青鳥は海上に遊び

鷲斯蒿下飛 鷲斯は蒿下に飛ぶ

沈浮不相宜 沈と浮と相宜しからず

羽翼各有歸 羽翼は各おの歸するところ有り

飄飄可終年 飄飄として年を終うべし

沈澹安是非 沈澹 安んぞ是非あらん

朝雲乘變化 朝雲は變化に乗じ

光耀世所希 光耀は世の希なる所なり

精衛銜木石 精衛は木石を銜む

誰能測幽微 誰か能く幽微を測らん

一一の細かい考證は省略するが、例によってこの詩も、阮籍「詠懷詩」中の語彙を集めてできていて一見よく似ているのだが、肝腎な所で違っている。どこが違っているかというと、阮籍の「詠懷詩」は、「八十二首のすべてが、悲哀の歌である」(吉川幸次郎博士「阮籍の『詠懷詩』について」「吉川幸次郎全集」第七卷二〇一〜二〇二頁)。ところが、江淹のこの詩にうたわれているものは、「悲哀」ではなく、

むしろ全ての事象を不可知論に包み込んでしまうことによって、「悲哀」を止揚した超越者のうたとしてうたわれているようにみえるのである。これは、阮籍の「詠懷詩」の本質を正しく表現し得ているとはいえない。なるほど「詠懷詩」其の二二は、「夏后は靈輿に乗り、夸父は鄧林と爲る。存亡は變化に従い、日月に浮沈有り。鳳凰は參差を鳴らし、伶倫は其の音を發す。王子は簫管を好み、世々相追尋す。誰か言う見るべからずと、青鳥よ我が心を明らかにせよ」とうたわれていて、一種の達觀を感じさせるようなうたいぶりなのであり、又確かに「大人先生傳」において、大膽にも、世間の「君子」を禪内をはい回るだけで、それ以上出ないでよしとしている「蝨」に喩えたのも阮籍であったが、しかし、やはり既に言及した顔延之の「五君詠」にうたう「途窮」者としての阮籍の姿こそ、「詠懷詩」の作者としては、最もふさわしいものではないだろうか。

本歌とのずれの方をこそ感じさせるものをもう一例示そう。郭璞の詩に模擬した「郭弘農遊仙璞」である。

崦山多靈草 崦山には靈草多く
 海濱饒奇石 海濱には奇石饒し
 偃蹇尋青雲 偃蹇として青雲を尋ね
 隱淪駐精魄 隱淪して精魄を駐む
 道人讀丹經 道人は丹經を讀み
 方士鍊玉液 方士は玉液を鍊る
 朱霞入窗牖 朱霞は窗牖に入り
 曜靈照空隙 曜靈は空隙を照らす
 傲睨摘木芝 傲睨して木芝を摘み
 凌波采水碧 波を凌いで水碧を采る
 眇然萬里遊 眇然として萬里に遊び
 矯掌望煙客 掌を矯げて煙客を望む
 永得安期術 永く安期の術を得ば
 豈愁濛汜迫 豈に濛汜の迫るを愁えんや

郭璞の詩の本質を「遊仙」と總括しているのは、まことに當を得たものであろう。しかしながら、郭璞の一連の「遊仙詩」は、江淹の模擬詩が詠じているような「遊仙」

江淹「雜體詩」三十首について（森）

の賛美に終始しているのでは決してなくって、「詩品」が郭璞の詩を論じて、「但だ遊仙の作は、辭に慷慨多く、玄宗より乖遠す。而も『虎豹の姿を奈何せん』と云い、又『翼を戔めて榛梗に棲う』と云うは、乃ち是れ坎壈の詠懷にして、列僊の趣きに非ざる也」と批評している面を無視しては、郭璞の「遊仙詩」を語るわけにはいかないのである。詳しいことは、興膳宏氏「詩人としての郭璞」（『中國文學報』第一九冊所收）を参照されたいが、郭璞の實際の作品に即してみてもみるならば、「文選」卷二一には七首收められており、其の五の一節は、「潛頴は青陽を怨み、陵苕は素秋を哀しむ。悲しみ來りて丹心を側ましめ、零涙は纓に緣りて流る」とうたわれており、「怨」「哀」「悲」「涙」と、「遊仙」の賛美だけでは、律しきれない語が綴られている。ところが、江淹の模擬詩は、「永く安期の術を得ば 豈に濛汜の迫るを愁えんや」と結ぶだけで、郭璞の「遊仙詩」にうたわれている「坎壈の詠懷」、言い換えれば思想詩としての「遊仙詩」の面を、すっかり捨象してしまっているのである。何綽が、「郭宏（弘）農遊仙は、亦本趣を

失せり」(「義門讀書記」と、江淹のこの詩にコメントして
いるのは、恐らくこういう點を指摘しての發言であると思
う。

このように、右に舉げた二つの模擬詩は、「亦商榷に乖
くこと無きに庶からん」(李善注に引く「雜體詩」の序^{追補②})とい
う江淹自身の言明にもかかわらず、筆者としては、多少期
待を裏切られたという感じを拭えないのだが、しかし、こ
のことを以て直ちに、江淹にとっては阮籍や郭璞のような
詩あるいはその人は、理解の外に立つものであったと結論
するとしたら、それは性急にすぎ、江淹の實際に必ずしも
そぐわないものを含むように思う。

確かに、「詩品」に「頗る感慨の詞多きも、厥の旨は淵
放にして、歸趣求め難し」と論評されているように、又沈
約が「詠懷」詩に註を施して解釋を試みているという事實
に窺えるように、既に阮籍の「詠懷」詩は、難解・晦澁な
ものという定評があつたけれども、江淹には、この論文の
冒頭に觸れておいたように、「效阮公詩」と題する十五首
連作の模擬詩があつて、それは例えば其の一

歲暮懷感傷	歲暮	感傷を懷き
中夕弄清琴	中夕	清琴を弄す
戾戾曙風急	戾戾として	曙風は急に
團團明月陰	團團として	明月は陰る
孤雲出北山	孤雲は北山より	出で
宿鳥驚東林	宿鳥は東林に	驚く
誰謂人道廣	誰か謂う人道	廣しと
憂慨自相尋	憂慨 自から相尋ぐ	
寧知霜雪後	寧ぞ知らん霜雪の	後
獨見松竹心	獨り松竹の心を見わす	

という作品であり、阮籍「詠懷詩」(「詩紀・魏九」)其の一

夜中不能寐	夜中	寐ぬる能わず
起坐彈鳴琴	起坐して	鳴琴を彈ず
薄帷鑒明月	薄帷に明月	鑒る
清風吹我衿	清風は我が衿を	吹く
孤鴻號外野	孤鴻は外野に	號び

朔鳥鳴北林 朔鳥は北林に鳴く

徘徊將何見 徘徊して將た何を見

憂思獨傷心 憂思して獨り心を傷ましむ

をすぐ連想させるほど、「雜體詩」のよりむしろ阮籍の詩に酷似していて、次に述べるが、「雜體詩」のとは異つて、阮籍「詠懷詩」のもつ一面をよく傳えているのである。

というのは、江淹の「效阮公詩」十五首が、「梁書」の本傳（卷一四）にいう「景素（宋の建平王）荊州と爲り、淹從いて鎮に之く。少帝即位すれども、失徳多し。景素専ら上流を據め、威な此に因りて事を舉げんことを勸む。淹毎に従容として諫めて曰く、『流言の禍を納るるは、二叔の同じく亡ぶ所以なり、抵局して怨みを銜むは、七國の焉に俱に斃するなり。殿下の宗廟の安からんことを求めずして、左右の計を信ずるは、則ち復た麋鹿霜露の姑蘇の臺に棲むを見んとするなり矣』と。景素納れず。京口を鎮するに及んで、淹又鎮軍參軍事と爲り、南東海郡丞を領す。景素腹心と日夜謀議するに、淹禍機將に發せんとするを知り、乃

ち詩十五首を贈り以て諷せり焉。」の詩十五首を指すのだとすれば、ちょうど阮籍の「詠懷詩」製作の意圖が、魏晉易姓革命の際の司馬氏やその一黨に對する諷刺であつたように、篡奪を目論む建平王劉景素を諷諫するには、「效阮公詩」十五首こそ、最もふさわしいものではなかつたろうか。そして、ある意味では、「效阮公詩」十五首は、「雜體詩」とは違つた、いわば身を以て示した阮籍「詠懷詩」に對する江淹の解釋であつたといえるのであり、ここでも、沈約が散文で解釋を示したのを、江淹は詩の創作によつて解釋を示したという、二人のこの對照はなかなか面白いのだが、それはさておき、例えば「效阮公詩」其の五は、次の如くである。

陰陽不可知 陰陽は知るべからず

鬼神惟杳冥 鬼神は惟れ杳冥たり

暫試武帝貌 暫く武帝の貌を試み

一見李后靈 一たび李后の靈を見よ

同情淪異物 情を同じくして異物に淪み

有體入無形 有體もて無形に入る

賢聖共草昧 賢も聖も共に草昧たり

仁智焉足明 仁と智と焉んぞ明らかにするに足らん

變化未有極 變化は未だ極り有らず

恍惚誰能精 恍惚として誰か能く精しからん

この詩をみれば、「雜體詩」と似かよった單純な不可知論の表明のようにみえるが、頭からの不可知論ではなく、どこか魯迅の散文詩「希望」を髣髴させ、希望を抱きながらその希望が達成されないでその後に襲ってくる絶望にも似た、「雜體詩」にはみられない、何か深い悲哀をこの詩の底には湛えている如く感じられるのであり、殊に十五首連作の中で讀むと、一層そのように感じられるのであって、これらの詩は、江淹なりに阮籍「詠懷詩」の本質を理解し、自分のものとしていたことを雄辯に物語っている。

然らば、何故「雜體詩」においては、あのようなうたい方をしたのであろうか。結論を先に下すと、これらの詩が「雜體詩」であったからであると思う。このようにいえば、

何も説明したことにならないように聞こえるであろうが、つまりこうである。江淹が「雜體詩」三十首を製作するに當って取った態度は、彼の内部から湧き起る押え難い彼自身の感興を、文字に託そうとするものではなく、他人が作った詩を如何に巧妙に模倣し直すか、ということであった。そういう場合、詩の内容の深刻さよりも、むしろ字面に現われた現象的な面の模倣に傾き易いのが自然というものではないだろうか。三十人という決して少ないとはいえない詩人の、様々の詩風を再現しようとした「雜體詩」というのは、元來そのような結果生まれたものであって、その皮相さを最もあらわにしたのが、右にみた的確に本質を衝いているとはいいいないが、そうかといって全然見當はずれでもない、いわば適當な所でお茶を濁したような阮籍や郭璞の詩に對する模倣詩ではなかったであらうか。

既に述べたように、「雜體詩」三十首というのは、五言詩による文學史でもあったわけだが、五言詩によって文學史を作ってみせたということ自體、既に彼の特異な才能を十分示し、世人を吃驚させるに足る奇抜なことであり、漢

から宋までの詩史の流れの中で、阮籍なら阮籍の詩、郭璞なら郭璞の詩の大まかな特徴が、雰囲気としてあるいは印象として讀んだ後に讀者の心に傳えることができれば、江淹にしてみれば、その製作意圖は、大體達成されたとしてよかつたのではないか。

五

二章において作品に即して述べたように、「雜體詩」三十首の創作態度というのは、いつてみれば作者江淹自身の個人的な體驗・立場から切り離して、第三者的な立場から客觀的に模擬創作したものであった。ところでこういう創作態度は、ひとり「雜體詩」三十首のみに發揮されているのではなく、この論文の冒頭に掲げておいた「恨賦」・「別賦」にも窺われるのである。この論稿の主題と多少關わりがあり、又江淹の文學を考える上で重要な作品と思われるので、以下この賦について少々述べることにする。

曹道衡氏が、「江淹及其作品」（一九六一・三・二九附「光明日報」の「文學遺產・第三五五期」）の中で指摘されているよう

に、これらの賦の根底には、無論江淹自身の深刻な體驗が横たわっているにちがいないのであり、又我々がこれらの賦を讀むとき、例えば「恨賦」の

秋日蕭索 秋日は蕭索として

浮雲無光 浮雲は光無し

春草暮兮秋風驚 春草暮れて秋風驚き

秋風罷兮春草生 秋風罷みて春草生ず

や「別賦」の

至如一赴絶國 一たび絶國に赴くが如きに至りては

詎相見期 詎ぞ相見の期あらん

視喬木兮故里 喬木を故里に視

決北梁兮永辭 北梁に決わかれて永く辭す

左右兮魂動 左右 魂動き

親賓兮淚滋 親賓 淚滋し

可班荆兮贈恨 荆を班しきて恨みを贈るべく

唯罇酒兮敘悲 唯だ罇酒のみ悲しみを敘ぶ

值秋鴈兮飛日 秋鴈の飛ぶ日に値い

當白露兮下時 白露の下る時に當る

怨復怨兮遠山曲 怨みて復た怨む遠山の曲

去復去兮長河湄 去りて復た去る長河の湄

春宮闕此青苔色 春宮は此の青苔の色に闕され

秋帳含茲明月光 秋帳は茲の明月の光を含む

などの描寫にみられる感傷性や抒情性に感動を起こすであろう。そして、事實これは、江淹の文學を特色づけるものであり、彼の文學の地色とさえいえる。

しかし、我々がこれらの賦に對して興味を覺えるのは、そういう面ばかりでなく、これらの賦の創作方法、賦の構成の特異さにもある。「恨賦」を取り上げてみてみよう。長くなるが全文引用する。

試望平原

蔓草縈骨

拱木斂魂

人生到此

天道寧論

於是僕本恨人

心驚不已

直念古者

伏恨而死

(1)至如秦帝按劍

諸侯西馳

削平天下

同文共規

華山爲城

紫淵爲池

雄圖旣溢

武力未畢

方架鼃鼃以爲梁

試みに平原を望めば

蔓草は骨に縈い

拱木は魂を斂む

人生 此に到る

天道 寧ぞ論ぜんや

是に於いて僕は本恨人なり

心驚きて已まず

直ちに念う古者むかし

恨みに伏して死せしものを

秦帝 劍おさを按え

諸侯 西に馳するが如きに至りては

天下を削平して

文を同じくして規を共にす

華山を城と爲し

紫淵を池と爲す

雄圖 旣に溢れて

武力 未だ畢らず

方に鼃鼃を架けて以て梁と爲し

巡海右以送日

海右を巡りて以て日を送る

一旦魂斷

一旦魂斷えて

宮車晚出

宮車は晩に出づ

(2)若乃趙王既虜

若しくは乃ち趙王既に虜となり

遷於房陵

房陵に遷さる

薄暮心動

薄暮に心動き

昧旦神興

昧旦に神興る

別豔姬與美女

豔姬と美女とに別れ

喪金輿及玉乘

金輿と玉乗とを喪えり

置酒欲飲

置酒して飲まんと欲すれば

悲來填膺

悲しみ來りて膺に填つ

千秋萬歲

千秋 萬歲

爲怨難勝

怨み爲ること勝え難し

(3)至如李君降北

李君の北に降り

名辱身冤

名辱められ身冤せらるるが如きに至

りては

拔劔擊柱

劔を抜きて柱を撃ち

弔影慙魂

影を弔いて魂に慙ず

情往上郡

情は上郡に往き

心留鴈門

心は鴈門に留まる

裂帛繫書

帛を裂きて書を繫ぎ

誓還漢恩

漢恩に還いんことを誓いに

朝露溢至

朝露 溢かに至る

握手何言

手を握りて何をか言わん

(4)若夫明妃去時

若しくは夫れ明妃去る時

仰天太息

天を仰いで太息す

紫臺稍遠

紫臺は稍く遠ざかり

關山無極

關山は極り無し

搖風忽起

搖風は忽ち起り

白日西匿

白日は西に匿る

隴鴈少飛

隴鴈は飛ぶこと少なく

代雲寡色

代雲は色寡なし

望君王兮何期

君王を望むに何ぞ期あらん

終蕪絕兮異域

終に異域に蕪絶す

(5)至乃敬通見抵

乃ち敬通の抵せられ

罷歸田里

田里に罷め歸るに至りては

閉關却掃

關を閉じて却掃し

塞門不仕

門を塞いで仕えず

左對孺人

左に孺人に對^{むか}い

顧弄稚子

顧みて稚子に弄^{たわむ}る

脫略公卿

公卿を脱略し

跌宕文史

文史に跌宕するも

齋志沒地

齋志して地に沒し

長懷無已

長懷 已む無し

(6) 及夫中散下獄

夫の中散の獄に下り

神氣激揚

神氣の激揚するに及んでは

濁醪夕引

濁醪を夕に引き

素琴晨張

素琴を晨に張る

秋日蕭索

秋日は蕭索として

浮雲無光

浮雲は光無し

鬱青霞之奇意

青霞の奇意は鬱^{むす}ばれ

入脩夜之不暘

脩夜の暘^{あき}らかならざるに入る

(7) 或有孤臣危涕

或は有り孤臣は危涕し

孽子墜心

孽子は墜心す

遷客海上

海上に遷客となり

流戍隴陰

隴陰に流戍す

此人但聞悲風汨起

此の人但だ悲風の汨起するを聞き

血下涪衿

血下りて衿を濡す

亦復含酸茹歎

亦復た酸を含み歎を茹^くい

銷落湮沈

銷落して湮沈す

(8) 若廻騎疊跡

若しくは廻ち騎は跡を疊^{かさ}ね

車屯軌

車は軌を屯^{あつ}む

黃塵市地

黃塵は地を市^{やぐ}り

歌吹四起

歌吹は四もに起る

無不煙斷火絕

煙の斷え 火の絶えて

閉骨泉裏

骨を泉裏に閉ざさざる無し

已矣哉

已んぬる哉

春草暮兮秋風驚

春草暮れて秋風驚き

秋風罷兮春草生

秋風罷みて春草生ず

綺羅畢兮池館盡

綺羅畢りて池館盡き

琴瑟滅兮丘壟平

琴瑟滅して丘壟平らぐ

自古皆有死

古^{いにしへ}自り皆な死有り

莫不飲恨而吞聲 恨みを飲みて聲を吞まざるもの莫し

一句が主に四言と六言とでなるこの賦は、「秦帝」（秦始皇帝）「趙王」（秦に亡ぼされた趙王張敖）「李君」（漢李陵）「明妃」（漢王昭君）「敬通」（後漢馮衍）「中散」（晉嵇康）など八つの種々の「恨みに伏して死せしもの」の有様を、賦の常套法である羅列的な積み重ねによりつつ、モザイク的にはめこんで構成することによって、全體として「恨」みという極めて抽象的な一つのテーマを浮かび上がらせるように仕組まれているのであって、感傷性あるいは抒情性において、陸機の「歎逝賦」（「文選」卷一六）や潘岳の「懷舊賦」（同上）などの系列の上にあるながらも、江淹以前の賦と著しい區別をなさしめる、こういう構成法こそ、この賦を特色あるものにする一つの大きな要素である。

因みに、後世の詩人が、江淹の「恨賦」の如何なる所に興味を感じていたかをみてみよう。その資料となるのは、李白の「擬恨賦」（「李太白集」卷一）である。題が示す通り、李白のこの賦は、江淹の「恨賦」に模擬したものであるが、

江淹「雜體詩」三十首について（森）

この賦は、「晨に太山に登り、蒿里を一望す。松楸に骨寒く、宿草に墳毀^{こぼ}たる。浮生は嗟くべし、大運は此と同じくす。是に於いて僕は本壯夫なり、慷慨して歎まず。仰いで思う前賢の、恨みを飲んで没せしものを」に始まり、「已んぬる哉。桂華満ちて明月輝き、扶桑曉けて白日飛ぶ。玉顔滅^{ほろ}んで螻蟻聚り、碧臺空しくして歌舞稀なり。天道と共に盡き、骨を委^{まか}せて歸を同じくせざる莫し」で結ばれ、その間には、漢高祖、項羽、荊軻、孝武陳皇后、屈原、李斯など、やはり八つの「恨みを飲んで没せしもの」の有様をはめこんでいるのであり、具體例は省略するが、江淹の賦と較べていくつかの段落の句数が違うのみで、全く同じ句法、同じ構成を採用しているのである。

李白のこの賦にも、「日は金殿に冷やかに、霜は錦衣に凄たり。春草は緑を罷め、秋螢は亂れ飛ぶ」という一節などがあるのを見ると、江淹の賦の感傷性・抒情性に共鳴もし、あるいは「恨」みという強烈なテーマが、李白の想像力をかきたてたであろうが、李白をして「恨賦」に模擬せしめたものの主要な要因は、やはり「恨賦」の構成の面白

さ、特異さにより多くあつたと思われる。

そして、既に述べたように、あれやこれやの「恨」みの種々相を、モザイク的に組み合わせることによって、「恨」というテーマに迫っていくという、江淹の賦にみられる創作方法を可能にさせたその一つの理由は、作品に自己の姿を強く投入する一般の模擬詩にみられる態度ではなく、むしろフィクションをその旨とする小説にも似た、作者を第三者的な立場におくことによって可能であつた「雜體詩」三十首製作にみられた創作態度と一脈相通するところの態度ではなかつたであらうか。賦にうたわれている人物を、江淹自身の姿と必ずしもダブらせてみる必要はないのである。

六

これまで、「雜體詩」三十首について、その幾首かをとり上げて述べてきたように、模擬對象になつた詩人の詩の語句・措辭をそっくりそのまま移し變えるという方法が、江淹の模擬方法の大きな特徴であつたわけだが、こういう

方法は、ひとり「雜體詩」ばかりでなく、彼の模擬詩について全ていえることなのであつて、詩の持つ意味は異なるが、「效阮公詩」十五首もそうであつたし、「學魏文帝」詩もそうなのである。

西北有浮雲。西北に浮雲有り

繚繞華陰山。華陰山を繚繞す

惜哉時不遇。惜しい哉時遇わず

入夜值霜寒。夜に入りて霜の寒きに値う

秋風聒地起。秋風は地に聒かまひしく起り

吹我至幽燕。我を吹いて幽燕に至らしむ

幽燕非我國。幽燕は我が國に非ず

竊窬爲誰賢。竊窬 誰をか賢と爲す

少年歌且止。少年よ歌且く止めよ

歌聲斷客子。歌聲は客子を斷たしむ

この詩は、實に文帝の「雜詩」其の二（「文選」卷二九）

西。北。有。浮。雲。

亭亭如車蓋

惜哉時不遇

適與飄風會

吹我東南行

南五臣行至吳會

吳會非我鄉

安能久留滯

棄置勿復陳

客子常畏人

を焼き直したものに他ならない。こういう惡くいえば剽竊にも類した方法が、見事に結晶したのが、「雜體詩」三十首であったといえるが、本論の最後に、江淹が、「雜體詩」三十首を創作し得た原因について、更にもう一點述べてみたい。

それは、彼の文學における過度の修辭主義、そしてこの過度の修辭主義と裏表の關係にある文學の遊戲化にあったと思う。彼の文學にみられる修辭性は、既に示した「恨賦」や「別賦」に、その一端を垣間見ることができが、ここでは次のような詩を示してみよう。

窗塵歲時阻 窗塵は歲時阻けむしく

江淹「雜體詩」三十首について（森）

閨蕪日夜深 閨蕪は日夜深し

流黃久不織 流黃を久しく織らず

寧聞梭杼音 寧ぞ梭杼の音を聞かん

涼靄漂虛座 涼靄は虛座に漂い

清香盪空琴 清香は空琴に盪く

蜻引知寂寥 蜻引いて寂寥を知り

蛾飛測幽陰 蛾飛んで幽陰を測る

乃抱生死悼 乃ち生死の悼みを抱くなり

豈伊離別心 豈に伊ただに離別の心のみならんや

この詩は、彼の妻の死を悼んで作った「悼室人」と題する十首連作の詩の其の六である。「悼室人」詩は、明らかに潘岳の「悼亡詩」三首を意識して作られている（江淹の潘岳の詩に對する模擬詩のサブタイトルは「悼亡」——亡き妻を悼む——である）。しかし、江淹の詩は、右に引用した詩がよく示しているように、例えば潘岳「悼亡詩」の其の二の一節「衿を撫して長歎息し、覺えず涕は胷を濡す。胷を濡す安んぞ能く已まん、悲懷は中よ從り起こる。寢興に目には形を

存し、遺音は猶お耳に在り」を讀んで感じられるような、亡き妻に對するあふれ出る悲しみの心ではなく、妻の死に對する自己の悲哀の感情を如何に巧みにうたい上げるか、如何に表現に意匠をこらすか、ということこそが關心ではなかったかと疑われる。妻の死を前にして、悲しみの氣持が無かつたというつもりはないが。この詩の見せ場である「涼露は虛座に漂い、清香は空琴に盪く。蜻引いて寂寥を知り、蛾飛んで幽陰を測る」という描寫にみられる事物に對する感情移入は、江淹の感傷詩人としての面目をよく讀者に伝えるものであるが、彼の妻の死に對する悼みの感情を、「涼露」以下四句から直接肌に感じ取れるであろうか。觀念臭の強い、何か第三者的な臭いがしないか。

誤解のないようにことわっておくが、筆者は、修辭主義の故にその文學を否定的に捉えるつもりは毛頭ない。そもそも文學においては、修辭を抜きにしては、その存在すら考えられないのであって、詩は單に「志を言う」（『尚書・舜典』）のみならず、「情に緣りて綺靡」（陸機「文賦」）であつてこそ、その機能をよく果すものである。しかしながら、

文學の營みが、「情に緣」らない、内容の深刻さに裏打ちされない修辭主義へ修辭主義へと傾斜していくとき、文學の遊戲化、單に表現の面白さ、新奇さを衒つたものへ墮してしまふ恐れがないとは、いい切れないと思う。「悼室人」詩十首が、完全にそうだと斷定するつもりはないが、そういう面が全然ないとも、又いい切れないように思う。そして、この過剰な修辭主義と表裏する遊戲性の上に、自己を第三者的な立場におきながら、模擬對象になつた詩人の詩の語句をそっくりもちこむという方法を採用することによつて、別に花開いたのが、「雜體詩」三十首ではなかつたろうか。

劉勰が「文心雕龍・情采篇」において

昔詩人の什篇は、情の爲に文を造り、辭人の賦頌は、文の爲に情を造る。何を以てか其の然るを明らかにせん。蓋し風雅の興るや、志思は憤りを蓄えて、情性を吟詠し、以て其の上を諷す。此れ情の爲に文を造るなり。諸子の徒は、心の鬱陶するに非ずして、苟しくも夸飾を馳せ、

聲を鬻ぎ世を釣る、此れ文の爲に情を造るなり。故に情の爲にする者は要約して眞を寫し、文の爲にする者は淫麗にして煩濫す。而るに後の作者は、濫を採りて眞を忽せにし、遠く風雅を棄てて、近く辭賦を師とす。故に體情の製は日に疎に、逐文の篇は愈よ盛んなり。故に志は軒冕に深くして、汎く阜壤を詠い、心を幾務に纏いて、虚しく人外に述ぶる有り。眞宰存せず、翻として其れ反せり。(訓讀は興膳宏氏譯注「文心雕龍」世界古典文學全集25 筑摩書房による)

と、「後の作者」を「文の爲に情を造る」者と手きびしく批判したとき、劉勰は、「後の作者」たちの中に、江淹の名をも思い浮べていなかったであろうか。

結 び

以上、「雜體詩」三十首について、その問題のいくつかを述べてきたが、最後に次の一言を重ねて申し添えて結びとする。

江淹「雜體詩」三十首について(森)

文學というものは、それを作り出すのが彼自身の體驗・經歷の下に思考する人間である以上、その作品は、かく思考する人間である製作者の内面の眞實と何らかの形で結びつき、又それが現われざるを得ない。そういう意味では、「雜體詩」三十首も、製作者江淹自身の内面の幾分かを含むであろう。それは、前代の詩人の如何なる面を、如何なる詩を模擬對象として取り上げるか、という創作前の選擇の段階に、既に現われている。四章のところでみた郭璞の「遊仙詩」に對する模擬詩が、思想詩としての面を全く捨象してしまつて、單なる、讀む者の目を樂しませてくれる、きらびやかな「遊仙」の有様の描寫に終つてゐるのは、あるいは江淹の「丹砂可學」と題する賦の一節

於是乘河漢之光氣 是に於いて河漢の光氣に乗り

騎列星之綵色 列星の綵色に騎る

輟陰陽於形有 陰陽を形有に輟め

傳變化於心識 變化を心識に傳う

浮恍惚而無涯 恍惚に浮びて涯無く

泛靈怪而未極 靈怪に泛びて未だ極まらず

架日月之精照 日月の精照を架け

竊蛟龍之毛翼 蛟龍の毛翼を竊ぐ

に窺われるように、彼の神仙認識が、ただ頭の中で創造された神祕的、幻想的な觀念の遊びに傾きがちであつたという事實と關係があるかも知れない。あるいは又、彼の自序傳に「淹管に云く、人生當に性に適うを楽しみと爲すべし、安んぞ能く精意苦力し、身後の名を求めん哉」という、彼の享樂主義的性癖と關係があるかも知れない。

しかしながら、「雜體詩」三十首は、その製作の意圖の一つが模倣による面白さをねらつたものであり、やはり個個の詩そのものは、江淹の内面的姿とは一應切り離して考へなければならぬのであつて、このことを押えておかないと、とんでもない誤解を起さないと限らない。

江淹の内面的眞實を考察する爲には、「雜體詩」三十首も勿論無視し去るわけにはいかないが、彼の別の作品に求められなければならないのであり、こういう點においても、

「雜體詩」三十首は、一般の模擬詩とは異つた、文學作品として一種の變り種ではなかつたか。了

注釋

- ① 彼の全體像については、高橋和巳氏「江淹の文學」（『吉川幸次郎博士退休記念論文集』一九六八年所收）を參照。
- ② 「樂府」を含めて百餘首現存し、彼の詩文集は、「江文通文集」と題して「四部叢刊初編」中に收められてある。
- ③ 前掲論文。
- ④ 「李善注」本に「張」とするのは誤。「文選考異」を見よ。
- ⑤ 「涯」は上平佳韻でなく、上平支韻とみなすべきである。
- ⑥ 王力著「南北朝詩人用韻考」（『漢語史論文集』所収）を參照せよ。
- ⑦ 顏延之の詩の一例を示す。阮公雖淪跡 識密鑒亦洞 沈醉似埋照 寓辭類託諷 長嘯若懷人 越禮自驚衆 物故不可論 途窮能無慟。題は「阮步兵」。五臣は、「此れ延年（顏延之の字）自ら託し以て途窮者と爲すなり」と注し、五首全てこういう見解であり、又五臣以前に、梁の沈約撰「宋書」の本傳（卷七三）も、嵇康・阮籍・阮咸・劉伶の四首について指摘し、「此の四句、蓋し自序也」と述べている。
- ⑧ 陶彭注「靖節先生集」卷四に江淹の模擬詩が收められており、その注を見よ。
- ⑨ 淵明の詩に「道路迢迢且長、風波阻中塗」（『飲酒』詩其の

十) というのがあるが、心象風景とみる必要はないように思う。

⑨ 一九七二年中華書局出版「南齊書」の末尾に附載。

⑩ 丁福保編纂「全漢三國晉南北朝詩」による。

⑪ 訓讀は上掲「文學論集」による。

⑫ 序でいっておくと、段成式「酉陽雜俎卷一二語資」の記述するところによれば、李白は、「恨賦」ばかりでなく、「文選」の作品三篇に模擬したが、内一篇は氣にそわなくて焼いてしまい、この「擬恨賦」と、やはり江淹の「別賦」に模擬した「擬別賦」(?)を残したということである。李白が江淹の賦を愛讀していたということを證するに足る話であるが、残念ながら「擬別賦」の方は亡失してしまつて、今は存在しない。

追補①

嵇康の詩は、四言詩をきわだった特徴としているのだが、江淹は、にもかかわらず、嵇康の詩に對して、やはり五言詩による模擬詩を作っている。全體の整合という點から考えて、三十首全てを五言詩に統一しようとする意識が働いていたであらうということとを考慮に入れるとしても、このような江淹の意識の中に、既に五言詩の地位を窺うことができると思う。

追補②

ただし、「六臣注」本には、「序」の全文を載せ、又「文選集注殘」(京都帝國大學文學部景印舊鈔本)第三集第六一上にもみえる。